

裾花川扇状地遺跡群

NISHIGATA SITE 2ND

西方遺跡(2)

—上高田第一土地区画整理事業地点—

2004年9月

長野市教育委員会

序

長野市において、平成10年2月7日から16日間の熱戦がくりひろげられた第18回オリンピック冬季競技大会と、3月5日から10日間にわたり感動のドラマを魅せてくれた第7回パラリンピック冬季競技大会も、数多くの人々のご協力により大成功のうちに閉幕することができました。

思い起こせば平成3年6月15日の開催都市決定以来、高速道路や新幹線の開通、オリンピック会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした激変の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております西方遺跡は、奥裾花溪谷を源流とする裾花川が平野部で形成した扇状地上に立地する裾花川扇状地遺跡群を代表する遺跡であります。開発事業の性格上、今回の調査範囲は比較的狭いものでありますが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第107集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野市都市開発部区画整理課の皆様、施工業者の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成16年9月

長野市教育委員会
教育長 立 岩 睦 秀

例 言

- 1 本書は、長野市施工の開発事業「上高田第一土地区画整理事業」にともない、平成8・10・11年度に発掘調査を実施し、平成12・13・16年度に整理調査をおこなった埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野市都市開発部区画整理課長の依頼により、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）が直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野県長野市大字高田字西方1027番地他である。開発事業の総面積は約5.6haで、うち埋蔵文化財の包蔵面積を約8,500㎡と推定する。
- 4 発掘調査対象面積は、道路部分の1,400㎡であるが、地下埋設物等の制約から約800㎡を調査した。
- 5 発掘調査は、飯島と小野が実施した。整理調査は矢口・飯島の指導のもと小野が担当し、各調査員・作業員が各種作業を分担して行った。
- 6 本書の編集・執筆は、Ⅰ・Ⅱ章を飯島が、Ⅲ・Ⅳ章を矢口が担当した。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は「SBNK」と表記してある。
- 8 発掘調査の実施に際し、長野市都市開発部区画整理課ならびに地元高田区の皆様には埋蔵文化財に対して深いご理解と多大なご協力を賜った。また現場調査および整理調査において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。
長野市都市開発部区画整理課建設担当 早川和夫、大峽幸良、小幡法弘、
長野県土木部長野建設事務所建設課 小林秀樹、小林政広、本井宏宣
上高田区区长 中沢武彦、川端区区长 前島忠治
青木一男、白居直之、小野紀男、小林秀夫、土屋 積、広田和穂、前島 卓（敬称略）







凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 本調査において確認したすべての遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできるかぎり追認できるよう基礎データはそのまま保管してある。
- 2 調査区の概要については、国補街路事業地点の成果をあわせて各地区毎にⅢ章第2節において概説した。また検出した遺構と出土遺物については、Ⅲ章3節において時代別および遺構別に記述した。
- 3 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査区における座標北からの真北方向角は $+0^{\circ}10'30''$ であり、また磁北は真北より西へ約 $6^{\circ}40'$ の偏差がある。
- 4 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅱ系（東経 $138^{\circ}30'00''$ 、北緯 $36^{\circ}00'00''$ ）の座標値（日本測地系）と日本水準原点の標高を基準とし、併写実測図研究所の開発したコーディックシステムを採用するため同所に委託した。遺構断面図の数値は標高（m）を表す。
- 5 現場にて1/20の縮尺で基本現図を作成し、本書では基本的に1/80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 5 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を本遺跡に対応させて下記のとおり表記している。

SA…竪穴住居跡、SB…掘立柱建物跡、SD…溝跡・河川跡、SE…井戸跡、SH…柵・杭列、
SK…土坑、SP…小穴、SX…性格不明遺構・竅穴状遺構、Tr…トレンチ

- 6 遺物に関しては原寸にて実測図を作成した。本書では基本的に土器実測図1/4、土器拓影1/3、鉄・石製品1/2、等に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 7 挿入した遺物写真の縮尺は任意である。番号は実測図番号と一致する。
- 9 住居跡等の遺構実測図や土器等の遺物実測図において、焼土・炭化物等の範囲や土器の種類、黒色処理・赤色塗彩等の区別は網掛けによって下記のとおり表記した。

	…… 縄文土器・ 弥生土器・ 土器		…… 焼土硬化面・ 赤色塗彩の 範囲		…… 焼土の範囲
	…… 須恵器・ 陶磁器・ 灰釉陶器		…… 黒色処理・ 縄文施文の 範囲		…… 炭化物の範囲

目 次

序 例言 凡例 目次

I 調査経過	1
1 保護協議経過	1
2 発掘調査日誌抄	3
3 調査体制	4
II 遺跡周辺の環境	5
1 調査地の位置と地形	5
2 調査地周辺の発掘調査歴	7
III 調査成果	11
1 試掘調査	11
2 発掘調査の方法と各調査区の概要	12
3 遺構と遺物	19
(1) 古墳時代前期の遺構と遺物	19
F 4号住居址	19
遺物観察表	20
(2) 古墳時代後期・奈良時代の遺構と遺物	21
N 2号住居址	21
遺物観察表	21
(3) 平安時代の遺構と遺物	21
F 1号住居址	21
F 2号住居址	22
F 3号住居址	22
F 5号住居址	22
F 1号土坑	22
K 1号住居址	22
K 1号竪穴状遺構	22
L 1号住居址	23
L 2号住居址	24
M 1号住居址	24
M 2号住居址	26
N 1号住居址	26
遺物観察表	30
(4) 時期不明・その他の遺構	26
IV まとめ	33

遺構・遺物写真

報告書抄録

長野市の埋蔵文化財発掘調査報告書 奥付

挿 図 目 次

1 図	調査区位置図	5
2 図	長野市防災基本図地形分類図	6
3 図	調査地周辺の字境図	6
4 図	西方遺跡周辺の遺跡分布図	8
5 図	試掘坑（トレンチ）位置図	11
6 図	試掘坑（トレンチ）土層柱状図	12
7 図	調査区配置図	13
8 図	調査区配置図	15
9 図	A・B区遺構分布図	15
10 図	C・D・E区遺構分布図	16
11 図	F・G・H区遺構分布図	17
12 図	J・K・L・M・N・P区遺構分布図	18
13 図	F4号住居址実測図	19
14 図	F4号住居跡・その他の遺構出土土器実測図	20
15 図	N2号住居址実測図	21
16 図	N2号住居址出土土器実測図	21
17 図	F1・3・5号住居址実測図	23
18 図	F2号住居址・1号土坑、K2号住居址・1号竪穴状遺構実測図	24
19 図	L1・2号住居址、M1・2号住居址実測図	25
20 図	N1号住居址実測図	26
21 図	F1～5号住居址・1号土坑、検出面出土土器実測図	27
22 図	L2・3号住居址出土土器実測図	28
23 図	K1号住居址・竪穴状遺構、L1号住居址 M1・2号住居址、N1号住居址出土土器実測図	29
24 図	石・鉄製品実測図	30

I 調査経過

1 保護協議経過

調査地の所在する長野市高田地区は、J R信越本線長野駅東口から約1.2km、徒歩約15分間という恵まれた交通環境にある閑静な住宅街である。主要幹線沿いには商店・倉庫など商業系の建物と個人住宅とが混在し、中央部の多くは農地として利用されている。

平成3年6月15日、平成10(1998)年第18回オリンピック冬季競技大会の開催都市として長野市が選定された。以来、平成5年3月の上信越自動車道の開通や平成9年10月の北陸新幹線の営業開始、またオリンピック施設建設および会場周辺の道路整備など、長野市とその周辺はオリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなった。当地区においても上信越自動車道須坂長野東インターチェンジと長野駅東口を一直線に繋ぐ主要幹線である都市計画道路栗田屋高線(現主要地方道長野須坂インター線。以下、インター線)が、長野県土木部長野建設事務所(以下、建設事務所)が主管する国補街路(栗田屋高線高田)事業として整備されることとなり、それにとまなう急速な市街地化が予想され、いよいよ地区内の都市基盤整備が熱望されるようになったのである。

そもそも上高田土地区画整理事業(昭和47年10月9日長野原告示第610号)は、昭和47年10月に事業面積約25.7haで計画決定された経緯がある。以来、昭和56年7月17日や昭和58年12月13日に長野市長に対して地元より事業区域解消の陳情がなされるなど問題が山積し、具体的な事業化には至らなかった。そこでインター線整備を契機に該当路線に接する西側の約5.6haを第1期事業区域として分割し、直接長野市が施工する「上高田第一土地区画整理事業」(以下、区画整理事業)として再スタートすることとなったのである。

当該起因事業にとまなう埋蔵文化財保護協議は、平成6年7月15日に長野市都市開発部区画整理課(以下、区画整理課)担当が長野市教育委員会(以下、市教委)長野市埋蔵文化財センター(以下、センター)に來所した記録から始まる。第1期施工予定地区についてインター線整備を中心に平成7年10月工事着工予定という概要であった。当該地周辺はもともと裾花川の氾濫源であり最近まで遺跡のないところとして認識されてきたため、「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内ではなかった。しかし、オリンピック関連事業にとまなう平成5年度の岸田東沖遺跡発掘調査を契機に、「裾花川扇状地遺跡群」として注意を要する地域となったのである。センターでは、平成6年の秋から冬にかけて試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵が確認された場合には保護措置が必要となる旨を回答している。同年10月28日に開催された区画整理課長が主催する庁内関係各課の協議においては、平成7年度の農作物終了後に工事着工すること、インター線はオリンピックまでに完成させることが事業計画として説明された。センターとしては、平成6年度中の試掘調査実施と発掘調査となった場合のタイミングについて具申し、以後担当者間に調整することとなった。しかし、平成6年度中に試掘調査ができなかったことから平成7年4月4日に区画整理課との電話による協議を行い、平成8年1月24日付7区第263号にて区画整理課長から試掘調査の依頼書を受理した。同年2月9日に実施した試掘調査は、埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の4地点をバックホーにて掘削した。その結果埋蔵文化財は旧裾花川の河道跡と考えられる部分には存在せず、微高地と考えられる部分に包蔵が認められ、同月16日付7理第332号にて区画整理課長へ報告した。同年4月25日には区画整理課担当が來所され、事業地内のインター線の施工については工事監督を建設事務所に委託するものの事業主体は長野市であること、当該路線以外の施工は2～3年後となることを説明された。センターでは試掘結果を踏まえ、市施工部分の発掘調査を市単事業として実施し、建設事務所の発注する受託事業と調整を

図りながら進めることを説明すると共に関係書類の整備を依頼した。同年5月9日付8区第28号にて長野市長(区画整理課担当)から文化庁長官あての文化財保護法(以下、法)第57条3第1項の規程にともなう通知を受領し、同月20日付8埋第60号にて長野県教育委員会事務局文化財保護課埋蔵文化財係(以下、県教委)あて進達する。県教委からは同年6月6日付8教文第5-77号にて、発掘調査の実施という指導が通知された。これを受けて同年8月16日付8区第114号にて区画整理課長よりセンター所長あての発掘調査の依頼書を受領する。同年7月10日付8埋第139号にて法第98条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教委経由で文化庁長官あてに提出した。発掘調査は市単事業として市教委が平成8年8月19日から同年9月13日の間、発掘調査対象500㎡について実施した。調査区は建設事務所から委託されたインター線と同一であることから、調査区名も連番のE～G区(実質調査面積300㎡)とした。同年9月17日付8埋第206号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵物発見届」を関係機関へ通知し、同年11月8日付8教文第4-148号にて県教委より埋蔵物の文化財認定を受けた。

その後、埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる範囲において工事施工はなかったが、平成10年4月20日の区画整理課担当者との協議で、保護措置の対象としては平成10年度の施工予定区のうち市道長野西409号線部分となり、平成11年度は市道長野西408号線施工部分となった。平成10年度分は、同年5月25日付10区第37号にて法第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が区画整理課より市長名で提出され、同月26日付10埋第43号にて県教委に進達した。同年6月12日付10教文第5-58号にて県教委より発掘調査の実施を内容とする指導がある。これを受けて同年5月25日付の区画整理課長からの発掘調査実施依頼書に基づき、発掘調査対象670㎡について同年7月1日から8月17日の間、J・K区(実質調査面積300㎡)の発掘調査を実施した。法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を同年7月1日付10埋第75号にて県教委に報告し、同年8月19日付10埋第77号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵物発見届」を関係機関に提出した。

平成11年度分については、平成11年1月18日付10区第285号にて市長名で提出された法第57条の3第1項の規定に基づく通知を受領し、同年2月8日付10埋第149号にて県教委あて進達した。同月23日付10教文第5-269号による県教委からの指導に基づき、同年4月1日付11埋第14号により「発掘調査範囲について」県教委に申請し、同月6日付11教文第25-5号にて県教委より発掘調査範囲の決定が通知された。これを受けて法第98条の2第1項の規定に基づく県教委あての報告を提出する。同年1月18日付で区画整理課長より依頼された平成11年度分、発掘調査対象面積225㎡(L～M・P区、200㎡)について同年5月6日から26日にかけて実施した。同月28日付11埋第51・52号にて「発掘調査終了届」と「埋蔵文化財の発見について」を関係機関に提出した。これをもって現地における発掘作業はすべて終了した。

整理作業は平成12・13年度にセンターにおいて遺物整理を中心に実施し、平成16年度に発掘調査報告書として本書を刊行し、起因事業にともなう埋蔵文化財発掘調査事業はすべて完了した。

2 発掘調査日誌抄

1996（平成8）年度

- 8月19日(明) G区から重機による表土剥ぎ開始(～26日)。
8月21日(火) 作業員投入。G区遺構検出後、遺構掘削。
8月22日(水) G区写真撮影、調査終了。F区遺構検出開始。
8月23日(木) E区調査開始。写真撮影、調査終了。
8月26日(日) F区SA1～5、SK等の調査。
8月27・28日(火・水) 降雨により作業中止。
8月29日(木) F区SA1～5、SK等の調査継続。
9月2日(日) 業者による遺構測量。
9月3日(月) 遺構図結線。床面等下層掘り下げ。
9月4日(火) F区1次面全体写真撮影。
9月6日(木) F区SA1～5、SK等の調査継続。
9月11日(火) F区2次面全体写真撮影。遺構測量。
9月12日(水) 遺構図結線。器材撤収。E～G区調査終了。

1998（平成10）年度

- 7月1日(火) J区から重機による表土剥ぎ開始(～2日)。
7月6日(日) 作業員投入。遺構検出・掘削後、遺構測量。
7月7日(月) J区2次面の重機掘削。
7月8日(火) K区重機による表土剥ぎ。
7月13日(日) J区2次面・K区1次面遺構検出後調査開始。
7月14日(月) J区2次面・K区1次面の調査継続。
7月16日(水) J区2次面・K区1次面全体写真撮影。
7月17日(木) 遺構測量。器材撤収。J・K区調査終了。

1999（平成11）年度

- 5月6日(木) P・N区の重機による表土剥ぎ。
5月7日(金) M・L区の重機による表土剥ぎ。
5月10日(日) 作業員投入。遺構検出後調査開始。
5月11日(月) L区SA1・2の調査。
5月12日(火) L区SA3・SK、M区の調査。
5月17日(日) L区SA2カマド・M区SA2・N区SA1の調査。
5月18日(月) L区全体写真撮影。
5月20日(火) P区SD1～3の調査。
5月24日(日) 全体写真撮影。L～N・P区調査終了。

現地におけるすべての調査を完了。



1-1 F区の調査



1-2 G区の調査



1-3 L区の調査



1-4 M区の調査

3 調査体制

埋蔵文化財の保護措置については、史跡等整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会社会教育課（文化課・現文化財課）が担当し、各種開発行為にともなう緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。

【平成8～13年度】

調査主体者	長野市教育委員会 教育長	滝沢忠男（～H10）・久保 健（H10～）
調査機関	長野市埋蔵文化財センター所長	九田修三（～H9）・小林重夫（H10） ・中島昌之（H11） ・磯野久夫（H12～） 所長補佐 小林重夫（～H8）・矢口忠良・宮澤秀幸（H10）
庶務係 係長	小林重夫（～H9）・宮澤秀幸（H10）・北村実寛（H11～）	
事務員	青木厚子	
調査係 係長	矢口忠良（～H12） ・（青木和明、H9～文化課兼務）	
主査	青木和明（～H8）・千野 浩・飯島哲也（H12～）	
主事	飯島哲也（～H11、主任調査員）・風間栄一・小林和子	
専門主事	清水 武（～H9）・荒木 宏（H10～12）	
専門員	中殿章子・山田美弥子・西澤真弓・小野由美子（調査員）・堀内健次・ 藤田隆之・宮川明美・小林まゆ佳（～H11、調査員）・勝田智紀（H8）・ 清水竜太（H10～）・内山 梢（H13～）	
発掘作業員	上原芳子、北沢 真、小池久子、小林春枝、小山さと子、清水八郎、武田モト子、 徳竹勇次、富岡実子、中澤けさを、中條悦子、中村 清、中村邦男、中村納子、 松木よしみ、三上文子、宮澤照暁、山崎恒子、吉原幸子、和田千代子、和田文雄	
整理作業員	岡沢治子、倉島敦子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、田中はま江、田中むつ子、 塚田容子、徳成奈於子、富田景子、西尾千枝、橋爪孝次、松沢ナオエ、三好明子、 向山純子、村松正子	
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所代表取締役	杉本幸治
重機等賃貸借	長野建設株式会社代表取締役	松林重好、株式会社鹿熊組代表取締役 鹿熊 肇

【平成16年度】

調査主体者	長野市教育委員会 教育長	立岩睦秀
調査機関	長野市教育委員会文化財課 課長	塩澤一郎
	局主幹兼文化財課埋蔵文化財センター所長	矢口忠良（編集、Ⅲ・Ⅳ章）
庶務担当 係長	山岸恒雄	事務職員 吉村久江
調査担当 係長	青木和明	
主査	飯島哲也（Ⅰ・Ⅱ章他）・風間栄一（遺物写真）	主事 小林和子
専門員	堀内健次・清水竜太・遠藤恵実子・長瀬 出・山野井智子・石丸敦史・ 小出泰弘・森田利枝・宮沢浩司・山岸千晃	
調査員	青木善子、池田寛子、小野由美子、多羅沢美恵子、鳥羽徳子、中殿章子、 矢口榮子、武藤信子	

II 遺跡周辺の環境

1 調査地の位置と地形

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積404.35km²、人口約36万人の地方中核都市である。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40km・最大幅約10km・標高330～360mである。第四紀中ごろに形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

ミズバショウの群生地として有名な奥裾花渓谷を源流とする裾花川は、長野市街地に入り流路を急激に南に変え、犀川と直交するように合流する。これは慶長年間（1596～1615年）に、松代藩城代家老の花井吉成・吉雄父子により新規開削の河川改修がなされたもので、それ以前は長野市街地を東南方向に流れていた。現在の北八幡川・南八幡川・古川・計舘川・宮川の各流路は旧裾花川河道跡の微低地帯に導かれており、調査地付近の字境図〔第3図〕にも、川原・前河原などの古字名から、七瀬から連続する旧裾花川の河道だったことが推測される。

裾花川扇状地は旭山北麓の里島付近を扇頂部として、北は善光寺下～平林～北尾張部辺りで浅川扇状地との複合扇状地を形成する。南は若里～川合新田辺りで犀川氾濫原と接しながら東の千曲川氾濫原に向かって、100分の1程度の勾配で東南方向になだらかに傾斜している。扇頂部にあたる市街地西部では、裾花川に沿って数段の河岸段丘が形成されている。最高段丘には左岸に往生寺地籍、右岸に平築地籍が立地し、第2段丘には新諏訪町地籍が立地し、第3段丘には長野商業高等学校、第4段丘には長野県議員会館などが建てられている。扇中央部か



1図 調査位置図 (1:50,000)

ら扇端部にかけては、比高差2～4 m程度の低い崖が扇状地の傾斜方向に長く続いている。これらがかつて稲花川が扇状地面を刻んで流れた痕跡と考えられ、こうした地形から「長野」の名の起こりとする説もある。調査地の所在する西方と前河原、南向と久保沖の境は比高差1～2 m程度の浸食段丘が明瞭である〔第2図〕。高田の名のとおり同一微高地となる西方・寺村・南向には、それぞれ西方遺跡・寺村遺跡・南向塚古墳が立地し、古代からの土地利用がなされていた。扇状地南縁の若里にも犀川の側方浸食段丘が続いている。

このような地形のため高田地区もたびたび水害に見舞われている。1742（寛保2）年8月の、いわゆる「戊の満水」では稲花川・北八幡川・南八幡川の各所が押し切れられ、北高田村では14戸が浸水、80石の田畑が砂を被ったという。1891（明治24）年7月18日には大雨のために稲花川の堤防が芹田村字岡田で決壊し、久保沖の田んぼが一面水没したという。現在は平林・北条地籍に24,000㎡、遊水量90,000 t という北八幡川雨水調整池が建設され、大規模な水害は発生していない。

〔参考文献〕 長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第1巻 自然編 長野市

2 調査地周辺の発掘調査歴

西方遺跡の属する稲花川扇状地遺跡群は、市街地中心部に近いこともあり早くから住宅地あるいは商業地として機能していた。また、扇状地上の厚い堆積物に覆われ地表面での遺物散布状態や微地形の観察による遺跡範囲の推定が困難な地域であった。近年の市街地再開発事業などの土木工事にともない遺跡の新発見も含めてようやく遺跡範囲の推定が可能な状況となってきた。

1 西方遺跡 一県道インター線地点一

国補街路事業（主要地方道栗田屋島線高田）にともない、平成6年度から8年度に道路拡幅部を対象に発掘調査を実施した。堰や進入路の確保・地下埋設物等の制約から調査地は不連続でトレンチ的なものである。時期が判明できる遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒、古墳時代後期末から奈良時代の溝址1条、奈良時代溝址2条・土坑1基、平安時代の竪穴住居跡9軒を検出した。古墳時代前期の竪穴住居跡は大型で床面から多量の土器が出土している。南向塚古墳とは連続する微高地上にあり、時期的にも関連性がうかがえる。

2 西方遺跡(2) 一区画整理地点一（本書）

3 中沢城館跡

近年の造成・開発によって現状地形からは遺構の痕跡を見ることはできないが、古い地形図には堀跡や土塁が明瞭に表現されている〔第3図〕。また以前よりカワラケなどの土器片が大量に採集できる場所として知られていた。堀の内部は南北約55m、東西約40mの方形館で、南辺は旧稲花川の河道に面している。今回の発掘調査の際試掘トレンチを設定し、堀と考えられる深さ約2mの溝跡を検出したが、東側の溝肩部のみで後世の擾乱が著しく、対辺は確認されていない。

4 寺村遺跡

民間事業所建設工事に先立って約400㎡が発掘調査され、平安時代の竪穴住居跡6軒などが確認された。10世紀中頃から11世紀前半まで連続する集落遺跡と考えられる。

5 南向塚古墳

別名玉塚・直塚山・ながめ塚などとよばれ、長野市誌編さん事業の一環として墳丘測量調査が実施された。墳丘の形は切頭円錐形の円丘に小規模な前方部が南西につく前方後円墳とされているが、軌立貝形古墳や造出付円墳の可能性も否定できない。規模は全長46m・後円部の直径33m・後円部の高さ4.8m・前方部の長さ13m・幅

8 mを測る。段築・葺石・埴輪等の外部施設は認められず、内部施設もいっさい不明である。1910（明治43）年頃に後田部の東北斜面からメノウ製勾玉1点が表面採集されている。また、古墳を描いたものとしては県下最古の1759（宝暦9）年に描かれた絵図面が個人宅より1979（昭和54）年に発見されている。長野盆地平野部に立地する唯一の前方後円墳であり、1969（昭和44）年に市史跡に指定された。

6 八幡田沖遺跡 —南俣住宅地造成地点—

稲葉南俣住宅地造成事業にともない、平成5年度に発掘調査、翌6年度に整理調査が実施され、弥生時代後期から平安時代までの集落跡を確認した。調査面積3,900㎡に弥生後期は溝1条、古墳前～中期は堅穴住居跡6軒、古墳後期は堅穴住居跡12軒・掘立柱建物跡2棟、奈良～平安は堅穴住居跡7軒の遺構が検出されている。特に14号住居跡は古墳前期後葉の焼失住居で、良好なセツト関係が提示できる該期土器群が出土している。

7 八幡田沖遺跡(2) —信越郵政研修所地点—

信越郵政局研修所庁舎新築工事に先立ち、平成6年度に発掘調査を実施した。発掘調査面積190㎡の範囲に、奈良～平安時代前半の掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土坑1基が検出されている。



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|----------------|
| 1 西方遺跡 | 2 西方遺跡(2) | 3 中沢城館跡 | 4 寺村遺跡 |
| 5 南向塚古墳 | 6 八幡田沖遺跡(1) | 7 八幡田沖遺跡(2) | 8 芹田小学校遺跡 |
| 9 芹田東沖遺跡(1) | 10 芹田東沖遺跡(2) | 11 東香場遺跡 | 12 栗田城跡 |
| 13 栗田城跡(2) | 14 栗田城跡(3) | 15 御所遺跡 | 16・17 浅川扇状地遺跡群 |

4 図 西方遺跡周辺の遺跡分布図（1：20,000）

8 芹田小学校遺跡

1986(昭和61)年に、校舎増改築にともなって発掘調査が実施され、平安時代後半の竪穴住居跡2軒・溝跡2条などが確認された。竪穴住居跡は共に一辺が8m代と6m代であり、比較的大型に属するものである。古代芹田郷との関係が推測されている。

9 芹田東沖遺跡(1) 一栗田安茂里線地点一

都市計画道路栗田安茂里線建設事業にともない、平成4年度に1,300㎡が発掘調査された。平安時代と思われる柱穴をともなう水田遺構と平安時代～中世の溝跡4条が確認された。

10 芹田東沖遺跡(2) 一文化コンベンション地点一

長野市文化コンベンション施設等建設事業にともない、平成5年度に5,200㎡、平成6年度には3,400㎡、平成7年度に1,200㎡が発掘調査された。地表下約2mまでに2層の遺物包含層があり、下層からは縄文～弥生時代の土器片が出土している。上層は奈良～平安時代の遺構面であり竪穴住居跡44軒・独立柱建物跡13棟以上のほか溝跡1条や土坑・小穴が多数確認されている。特筆すべき出土遺物として「市寸」と墨書された須恵器環があげられる。現在も地名として残る若里の北市・南市はもと市村であり、寸の文字に村をあてることが可能であれば水内郡芹田郷との関連や後代の市村庄成立の背景として注視されよう。

11 東香場遺跡

1987(昭和62)年に、民間宅地造成工事に先立って256㎡が発掘調査された。古墳時代前期の土坑1基、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒と土坑4基、奈良時代の土坑4基、時期不明の竪穴住居跡2軒・土坑9基などが確認された。中世栗田氏の居城と考えられる栗田城(堀之内城)は東方120mに位置している。志野焼と思われる小皿1点も出土している。

12 栗田城跡 一グランドハイツ地点一

1990(平成2)年に、グランドハイツ東公園建設工事に先立って800㎡が発掘調査された。栗田城内郭部と推定される位置に、80基におよぶ土坑と柱穴群、それらにともなう400点以上の中世遺物が確認された。出土遺物の主な時期は14世紀代から15世紀前半であり、文献史料における栗田氏関係の記述との整合性がうかがえる。

13 栗田城跡(2) 一上條器城店建築地点一

1993(平成5)年に、北陸新幹線建設事業にともなう代替地としての上條器城店新築工事に先立ち、約500㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、溝跡3条と多数の土坑と柱穴群が検出されている。なかでも溝跡から出土した古瀬戸天目茶碗はほぼ完形の優品である。

14 栗田城跡(3) 一土木事業代替地地点一

1994(平成6)年に、長野県土地開発公社の委託により土木事業用地代替地先行取得事業にともなって約300㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、上層は15世紀末から16世紀前半、下層は14世紀代という2面の遺構面を検出した。上層面では土坑4基・溝跡2条と若干の柱穴群、下層面では竪穴状遺構1基・土坑7基・溝跡2条が検出されている。

15 御所遺跡 一鉄道学園跡地点一

長野駅周辺第二土地区画整理事業にともない、平成6年度に2,100㎡、平成7年度に1,100㎡が発掘調査された。調査地は中世信濃守護小笠原氏の館跡と推定されている場所であり、検出した遺構面2面のうち、上層面では中世館周辺部の居住域を示唆する柱穴群や溝跡・土坑が検出され、館跡に関連すると考えられる大溝も確認されている。下層面では古墳時代後期の竪穴住居跡60軒・溝跡10条、奈良～平安時代の竪穴住居跡14軒・溝跡6条などである。特筆すべき出土遺物として古墳時代の金箔板や玉類、皇朝十二銭の富寿神寶がある。

16・17 浅川扇状地遺跡群 —北陸新幹線地点—

平成5年度から長野市北部においても本格的に着手された北陸新幹線の建設工事は、浅川扇状地遺跡群の扇端部を横断する形で貫き、これにとまなう発掘調査が(財)長野県埋蔵文化財センターで実施している。これによれば、ほぼ全域にわたって埋蔵文化財の包蔵を確認することで、W2区(早苗町、16)調査区からは弥生時代中期後半の竪穴住居跡8軒・溝跡31条・土坑50基、古墳時代前期の竪穴住居跡23軒・掘立柱建物跡1棟・土壇墓3基・溝跡17条、土坑66基などが検出されている。またW3区(東鶴賀町、17)からは竪穴住居跡18軒(弥生時代中期後半3軒・弥生時代後期1軒・古墳時代前期5軒・古墳時代後期3軒・時期不明6軒)、時期不明の掘立柱建物跡5棟・欄列1条・溝跡17条、土坑79基などが検出されている。

このように今回の調査地点は、これら周辺の発掘調査と合わせて裾花川扇状地遺跡群の中でも近年集中して発掘調査された地域であり、今後個々の遺跡を検討することによって各時代の様相が明らかになろう。

〔参考文献〕

- 長野市教育委員会 1993～2004『長野市埋蔵文化財センター所報』No.4～16
 長野市教育委員会 1987『岸田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第21集
 長野市教育委員会 1988『東番場遺跡』長野市の埋蔵文化財第26集
 長野市教育委員会 1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡③』長野市の埋蔵文化財第38集
 長野市教育委員会 1994『栗田城跡②(東番場遺跡)』長野市の埋蔵文化財第61集
 長野市教育委員会 1995『栗田城跡③』長野市の埋蔵文化財第68集
 長野市教育委員会 1995『八幡田沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第70集
 長野市教育委員会 1997『裾花川扇状地遺跡群 寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第86集
 長野市教育委員会 1998『裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城跡』長野市の埋蔵文化財第91集
 飯島哲也・風間栄一 1998『長野市南向塚古墳墳丘測量調査報告』『市誌研究ながの』第5号
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5



- 1 国補街路(栗田屋島線) 2 上高田第一土地区画整理事業地 3 南向塚古墳
 4 国道18号線 5 桜ヶ岡中学校

Ⅱ-1 調査地周辺の航空写真(平成2年6月 ㈱ジャスティック撮影)

Ⅲ 調査成果

1 試掘調査

調査地 長野市大字高田字西方1027-1他（5図）

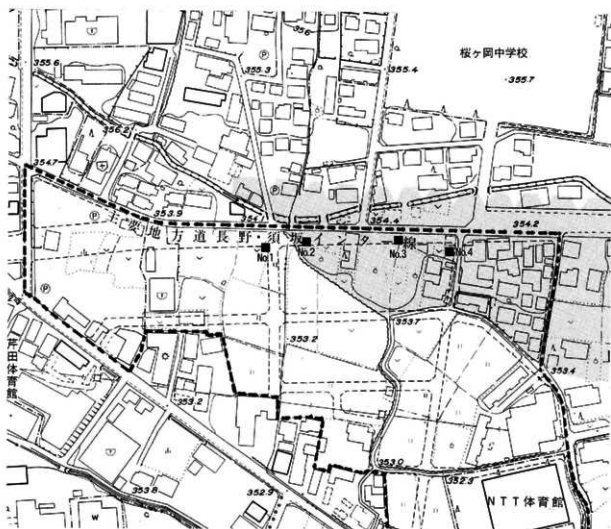
調査日 平成9年2月9日

調査の目的 開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であり、埋蔵文化財の包蔵状況によっては破壊の及ぶ可能性が考えられる。従って施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の状況を調査する。

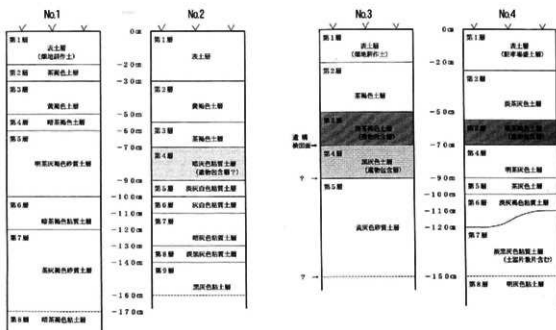
調査の方法 事業予定地内において埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑（トレンチ、L 2m×W 2m）を4カ所設定し、重機により掘削し、坑内断面の土層観察によって遺物包含層の有無及び深さを確認する。

調査の方法 任意の地点に試掘坑を4カ所設定する。

調査結果 試掘坑は事業予定地内の微高地部分を中心に3カ所、旧棉花川河道と思われる低地部に1カ所設定した。各試掘坑で確認された堆積土壌は扇状地に見られる砂礫の互層とは異なり礫石を全く含まないもので



5図 試掘坑（トレンチ）位置図（1：2,500、太点線内は事業地、アミ部は遺跡推定地）



6図 試掘坑（トレンチ）土層柱状図

ある。特にNo1トレンチでは河道部分に見られる層層が検出されなかったことは微高地と河道の境界部分の土層と思われる。No2トレンチでは明確に埋蔵文化財の包蔵は確認できなかったが、これも微高地内における埋蔵文化財の包蔵地の縁辺部と思われる。No3とNo4トレンチでは明確な遺物包含層を確認した。特にNo3トレンチでは土器片と共にカマド跡らしき焼上が検出され、住居址等の存在が予想される。明確な遺構検出面は1面であるが、その下層の状況からさらにもう1面の存在が予想される（6図）。

以上の結果により周辺に埋蔵文化財の包蔵が予想される。特に開発予定地内の北東部分では良好な埋蔵文化財の包蔵が確認されたため保護措置が必要である。旧裾花川河道であろう低地部分については保護措置の必要がないものと考えられる。

2 発掘調査の方法と各調査区の概要

発掘調査の対象地は関係機関三者の保護協議（I章1節参照）により、「国補街路（栗田屋島線高田）事業」「上高田第一土地区画整理事業」に分離し発掘調査を進めることとなった。また、工事工程に合わせA区からP区まで調査区を設定し順次調査を実施した。ただし、IとO区名は他の略号等との混乱を避けるため使用していない。この節では調査成果の全容を瞥見するため両事業調査区の概要を記載する（7図）。国補街路事業地点を対象とする調査はA区からD区・H区で、土地区画整理事業を起因とする調査区はE区以下アルファベット順の区名である。年度別調査区は平成6年度がA区、7年度にB区～D区、8年度にE区～H区、10年度にJ・K区、11年度にL～N区・P区である。以下、各調査区の遺構分布状況を記する（9～12図）。

A区（9図） 調査地の東端に位置する調査区で、調査面積としては最も広い調査区である。住居址2軒・7条の溝址・土坑3基を検出した。住居址は平安時代のものであるが、主軸方向は異なる。溝址の内北東から南西方向に掘り込まれた大型のSD7からは古墳時代後期末葉から奈良時代にかけての遺物が、同様のSD6及びSD1・2からは奈良時代の土器が出土している。土坑のSK1からも奈良時代の土器片が確認されている。こうした総体の傾向をみると、居住遺構は平安時代の所産であり、他の遺構は奈良時代を主体に機能していた遺構と

考えられる。なお、SD7から古墳時代中期の所産と思われる滑石製の孔門板が出土している。奈良時代前後の遺構の存在はこの区に集中し、居住域等は東側に展開が予想される。

B区(9区) 自動車整備工場の跡地で、攪乱が各所でみられた。明確に把握できた遺構は不整形な土坑状の掘り込み2基(SX1・2)と2条の溝址を検出したにすぎない。共に時代・時期は不明であるが、SD3から古墳時代前期に比定される小型環形土器片が出土している。

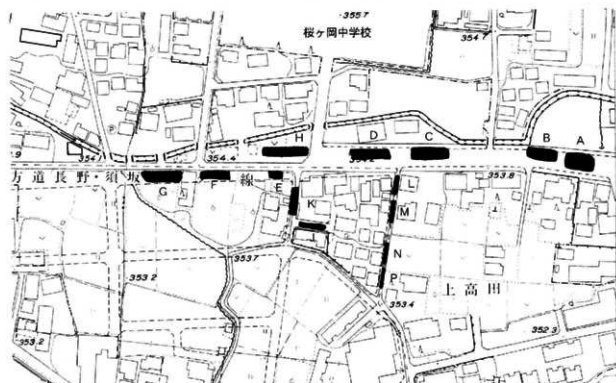
C区(10区) B区から約50m程西に位置する。この調査区だけ遺構面が2面あり、上層の1次面と2次面の平安時代遺構の深度差は約20cm・古墳時代前期遺構検出面まで約40cmを測る。1次面の遺構は平安時代住居址1軒(SA1)と時期不明の溝址6条・小穴が確認されているにすぎない。2次面では平安時代住居址2軒(SA2・3)及び古墳時代前期の住居址3軒(SA4~6)を検出した。これらの遺構は全面を露呈できたものではなく、全て調査区域外にのびており、規模等は不明である。

D区(10区) 調査では小穴と土坑状の落ち込みの一部が確認されたにすぎず、出土遺物もなく無遺構調査区といってもよい。

H区(11区) 桜ヶ岡中学校正面入り口通路の西側に位置する調査区で、水路を挟んで2小区に分かれる。東小区の調査では小穴群・溝址等を、西小区からは並列する短い溝址群を検出した。両小区共に遺物等の出土は認められず、西小区の溝址群はおそらく近世以降の畑作による痕跡であろう。東小区の遺構も同様のものと考えられる。

E区(10区) H区の南に位置する。この調査区も小穴と不整形な土坑状の落ち込みを確認したにすぎない。H区同様に近世以降の畑作跡と思われる。出土遺物はない。

F区(11区) 古墳時代前期と平安時代の遺構を検出したC区から西に約120mのところの位置する。遺構面は一面で、古墳時代前期住居址1軒(SA4)、平安時代住居址4軒(SA1~3・5)と長方形土坑1基(SK1)を検出した。土坑を除き他の遺構は部分露呈の調査で、未調査部は区域外にのびている。



7図 調査区配置図(1:2,500)

G区 (11区) 旧柳花川による河岸段丘先端部に位置する調査区である。遺構は小穴や溝址が点在状態で確認できる程度のもので、出土遺物もなく、遺跡の範囲がこの調査区までおよんでいないことを示している。

J区 (12区) 上地区画事業地内の東西路線の調査区で、遺構の存在確認のため駄目押しの意味を含めて約20cmの深度をもって上下二面の検出作業を行った。上下面共に小穴が散在している程度で、また遺物も検出面から平安時代の土器片が少量出土しているにすぎず、遺跡の南端付近の調査区といえる。小穴の時期については奈良時代に比定される完形の須恵器杯の出土をみたことから該期の所産とも考えられる。ただし、小屋組配列にはならない。

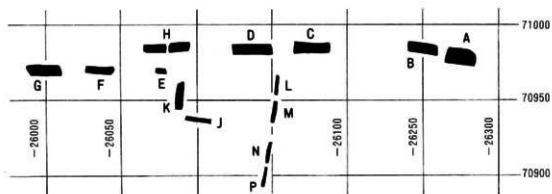
K区 (12区) E区南側の南北方向の調査区で、J区より北に位置する。平安時代の住居址1軒(SA1)・竪穴状遺構(SX1)及び時期不明の土坑・溝址等を検出した。この調査区までは居住域遺跡の範疇にはいる。

L区 (12区) C区の南側に位置する南北方向のトレンチ状の調査区である。平安時代の住居址2軒(SA1・2)と同時期と推定される土坑数基を検出した。住居址の大部分は調査区域外にある。

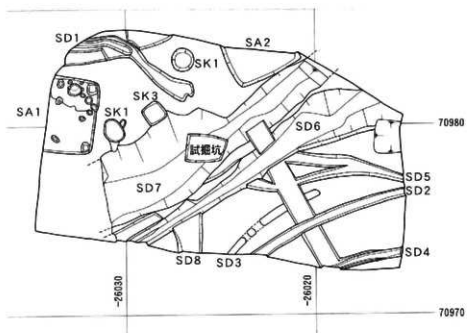
M区 (12区) L区と同様な調査区で、平安時代の住居址2軒(SA1・2)と西端の溝址や土坑等を検出した。住居址はL・N区と同様遺構の部分検出である。

N区 (12区) 奈良時代前後の住居址1軒(SA2)を抽出したが竪穴状遺構の可能性もある。平安時代の住居址1軒(SA1)の他に同時期と思われる土坑・溝址・小穴等を検出した。住居址は南側のP区に認められないことから居住域の南限をこの調査区に求められる。

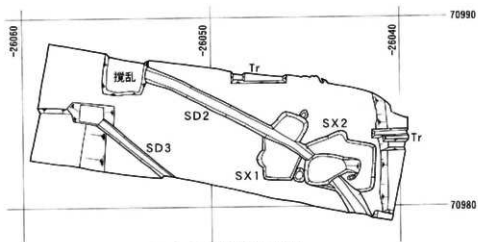
P区 (12区) 南端の調査区で、居住施設は確認されない。ただし、土坑・溝址等が展開していることから遺跡の南限付近に位置しているものと思われる。遺構からの出土遺物はないが、検出面から平安時代の土器片を得ている。



8图 调查区配置图 (1:2,500)

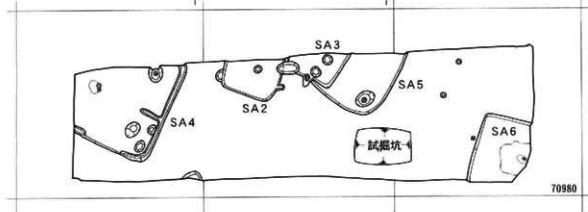
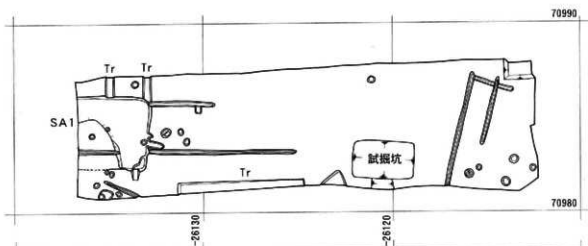


A 区 (国補街路事業地)

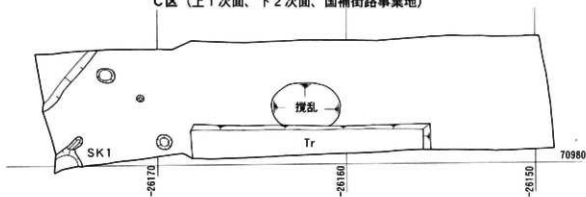


B 区 (国補街路事業地)

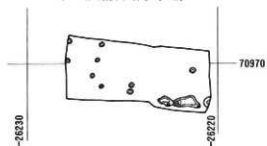
9图 A·B区遺構分布图 (1:200)



C区 (上1次面、下2次面、国補街路事業地)

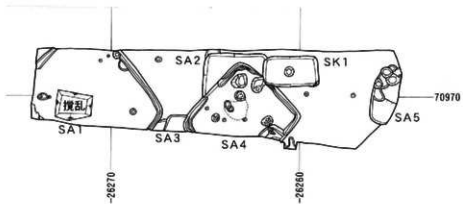


D区 (国補街路事業地)

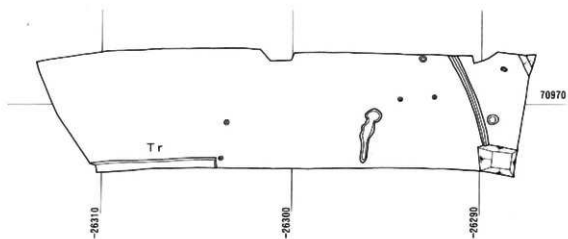


E区

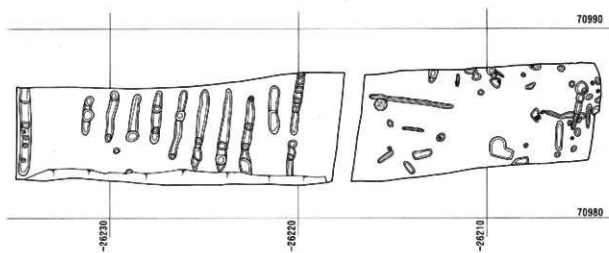
10图 C・D・E区遺構分布图 (1:200)



F 区

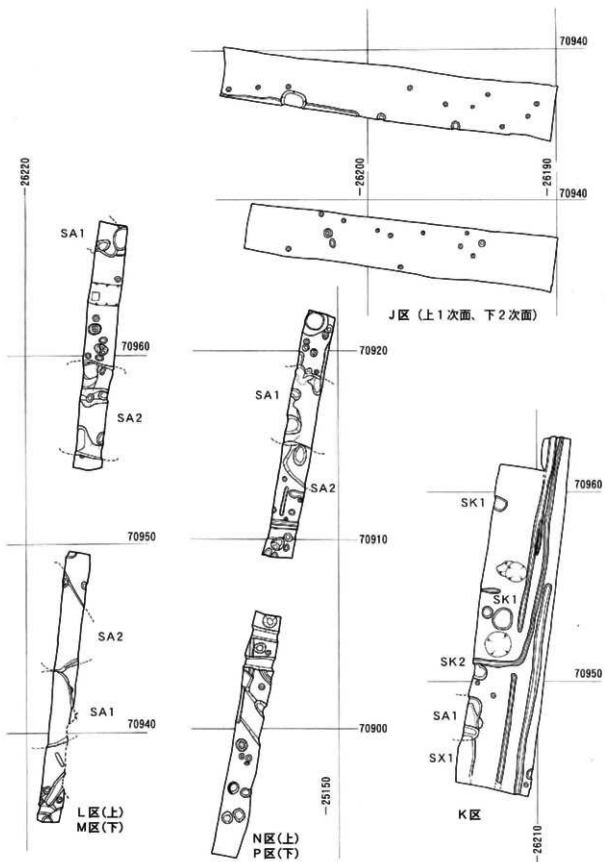


G 区



H 区 (国補街路事業地)

11图 F・G・H区遺構分布图 (1:200)



12图 J·K·L·M·N·P区遗构分布图 (1:200)

3 遺構と遺物

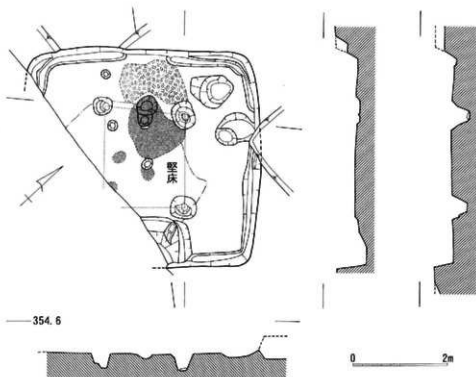
(1) 古墳時代前期の遺構と遺物

F4号住居址 (FSA4)

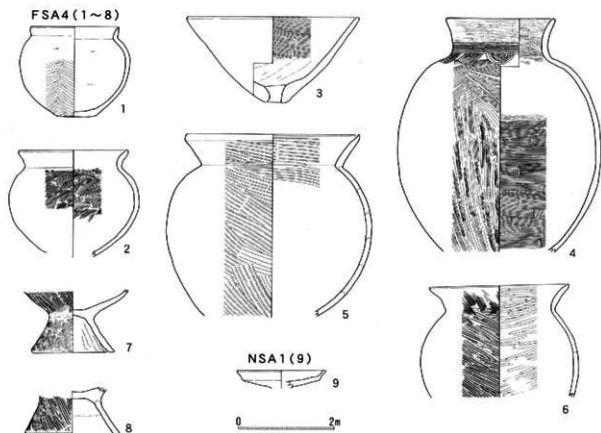
遺構 (13図) 調査区の中央に位置し、平安時代の2号・3号・6号住居址と重複関係にある。南東部を残し遺構のはほぼ3分の2を調査した。形態は方形を呈し、N48°W方向に主軸がある。規模は主軸4.6m・東西軸5m前後・検出面からの深さ35cmを測る。主柱穴は3個確認され、4個長方形配列になるものと思われる。炬は枕石を伴うもので北壁側の柱穴間中央に設けられており、浅い小穴状をなしていた。周辺には焼土・炭化物が散布しており、主柱穴間中央付近にも焼土の点在が認められた。一時的な地床炬と考えられる。床面は中央部がやや高くなり、堅緻な貼り床になる。周溝は不連続なものが各壁下に掘り込まれている。入口部の南壁下に長方形を呈する土坑状の掘り込みがある。床面から30cm程の深さのもので、性格は不明である。

遺物 (14図) 遺物の出土量は少ない。器種には鉢(1・2)・瓶(3)・壺(4)・甕(5・6)・台付甕(7・8)等があるが、この遺構からは祭祀形態土器の出土は認められない。瓶の形態は浅鉢形で、逆ハの字形を呈する。外面はヘラミガキ調整で、内面にはハケナデ痕が残る。壺は独特の形態と文様を有する。口縁部は頸部から直立して立ち上がり、上半部でわずかに外反する。体部は球形長胴で、最大径は体部中位にある。文様は頸部と接続する肩部に限定して描かれており、頸部には6本歯の髑髏描き平行線文・肩部には半円弧文がみられる。体部外面の調整はハケナデのちヘラミガキが施され、内面はハケナデで整えられている。5の甕の口唇部は面取りされ、内外面の調整も粗いハケ状工具が用いられており、前出のものと同趣を異にする。

その他の遺物 (14図) 平安時代のN1号住居址から当該期の土師器器台(9)が出土している。



13図 F4号住居址実測図 (1:80)



14図 F4号住居址・その他の遺構出土土器実測図(1:4)

遺物観察表

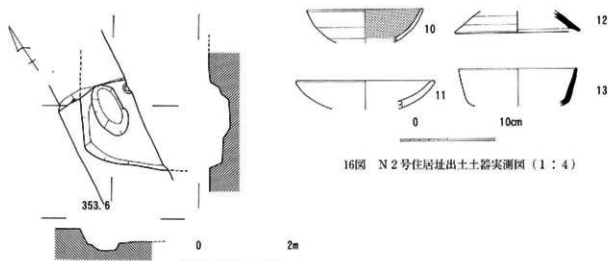
番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
FSA4 (14回)								
1	土師鉢	鉢	9.1	4.1	7.6	完形	外：ヘラミガキ・ナデ、内：ヘラナデ・ナデ	床
2	*	*	11.4			2/3	内外：ハケナデ・磨耗	*
3		甗	17.9	2.4	9.2	完形	外：ナデ、内：ハケナデ・ヘラナデ	*
4	*	壺	11.2			4/5	外：頸部6本歯櫛直縦文・肩部半円弧文・ハケナデ→ヘラミガキ 内：ハケナデ・ヘラナデ	
5	*	壺	18.2			2/3	内外：粗いハケナデ、体内：ハケナデ→ナデ	床
6	*	*	14.8			1/2	外：ハケナデ、内：ヘラナデ	
7	*	台付甗		8.6		1/5	*：*、*：ナデ、脚内：ヘラナデ	
8	*	*		9.4		1/5	*：*、*：*、*：ナデ	
NSA1 (14回)								
9	土師器台	器台		9.2		1/8	内外：ナデ	平安時代住居

(2) 古墳時代後期・奈良時代の遺構と遺物

N 2号住居址 (NSA 2)

遺構 (15図) 平安時代の1号住居址 (CSA 1) と重複関係にある。調査では南西隅部を検出したにすぎず、詳細な形態・規模等は不明である。単独的な存在であり、床面は軟弱で、柱穴・焼土等も確認されないことから堅穴状遺構の可能性が高い。

遺物 (16図) 出土量は少ない。器種には黒色土器杯 (10)、土師器杯 (11)、須恵器蓋 (12)・高台杯 (13) がある。調整は共にロクロによっている。1号住居址出土の長胴の甕 (23図118) は本住居址に所属する可能性がある。口縁部は体部から緩く外反し、頸部を形成しない。体部外面の調整はヘラケズリである。



15図 N 2号住居址実測図 (1:80)

16図 N 2号住居址出土土器実測図 (1:4)

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	備考
			口径	底径	器高			
NSA 2 (16図)								
10	黒色	杯	12.0			1/5	ロクロ、内：ヘラミガキ・黒	
11	土師	皿	14.3			*	*	
12	須恵	蓋	12.9			*	*、口縁：かえり	
13	*	高台杯	12.2			1/6	*	

(3) 平安時代の遺構と遺物

F 1号住居址 (FSA 1)

遺構 (17図) 調査区の西端に位置する大型の住居址である。調査では東側の半分ほどを露呈した。東西の規模は不明であるが、南北6.7mを測る隅丸方形の住居址と予想する。検出面からの掘り込みは25cmで、床面は軟弱で南・西に傾斜を有する。各壁下には周溝が巡る。カマド等の痕跡である焼土は確認されないが、北壁に沿いに炭化物の散布がみられた。主柱穴は確認されない。遺構の形態や規模から古墳時代前期の所産の可能性も捨てがたい。東壁の方向はN40°Wである。

遺物 (21図) 遺構規模の割には出土遺物は少なく、図上復元可能な土器片は壺 (14) 1 個体あるにすぎない。体部外面上半部はロクロ調整痕を残し、下半部はヘラケズリが施される。

F 2 号住居址 (FSA 2)

遺構 (18図) 調査区の中央に位置し、古墳時代前期の 4 号住居址・平安時代の 1 号土坑と重複関係にある。今回の調査で全景を露呈した唯一の住居址である。形態は方形を呈し、主軸 (東西) 3.5m・南北 3.7m・西壁高 22cm の規模である。主軸の方向はほぼ東西を指す。カマドは東棟中央右寄りに構築されているが、調査では構築石材・焼土塊化した火床及びわずかに突出する煙道を検出した。床面は東・北に傾くが堅緻である。遺物の多くはカマド周辺からの出土である。

遺物 (21図) 遺物の出土は比較的多い。器種には土師器杯 (14~19・21)・壺 (26・27)、黒色土器杯 (20・22・23)・碗 (24)、灰軸陶器碗 (25) 等がある。共にロクロ調整で、土師器・黒色土器の坏類内面はヘラミガキが施される。重複する 4 号住居址より土師器杯 (34~36) が出土しており、当該遺構に所属する可能性がある。

F 3 号住居址 (FSA 3)

遺構 (17図) 当該期の 2 号住居址と北壁で重複関係にある。調査では北壁側一部分を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われ、東西軸は N83° W 方向を指し、3.4m の規模になる。検出面からの深さは 8cm にすぎない。床面は平坦で軟弱である。

遺物 (21図) 出土量は少なく、土師器杯 (28~32)・黒色土器碗 (33) の器種がある。杯は 2 号住居址のものより口径・器高共に小型化している。

F 5 号住居址 (FSA 5)

遺構 (17図) 調査区の東端に位置し、調査では西側半分程を露呈した。形態は隅丸方形になるものと思われ、規模は一辺 3m 前後を推定する。床面は中央付近が高まりをみせ堅緻なものになる。北西隅部に数個の土坑状掘り込みがみられるが、性格は不明である。カマドの痕跡は確認されない。西壁の方向は N15° E を指す。

遺物 (21図) 出土遺物は少なく、黒色土器杯 (38)・灰軸陶器皿 (39・40)・土師器壺 (41) の器種がある。

F 1 号土坑 (FSK 1)

遺構 (18図) 2 号住居址と東側で重複関係にある。形態は長方形を呈し、東西 2.8m・南北 1.6m・検出面からの深さ 40cm の規模である。長軸方向はほぼ東西である。底面は平坦で、中央に直径 47cm・深さ 8cm 程の掘り込みがみられる。底面には完形の杯・碗各 1 個体、河原石 1 個が据え置かれていた。

遺物 (21図) 土師器杯 (42・43)、黒色土器碗 (44・45)、灰軸陶器皿 (46) が出土している。碗の高台は低く、断面が三角形を呈する。底部外面には糸切り痕を残す。

K 1 号住居址 (KSA 1)

遺構 (18図) 調査区の南側に位置し、1 号竪穴状遺構と重複関係にある。調査では東壁側の一部を検出したにすぎず、形態は隅丸方形になるものと思われるが、規模等は不明である。検出面からの深さは 20cm を測る。南壁に沿って幅 46cm・深さ 8cm 程の用途不明の溝状遺構が掘り込まれている。床面は平坦で軟弱である。

遺物 (23図) 床面から完形の黒色土器碗 (83) が出土している。

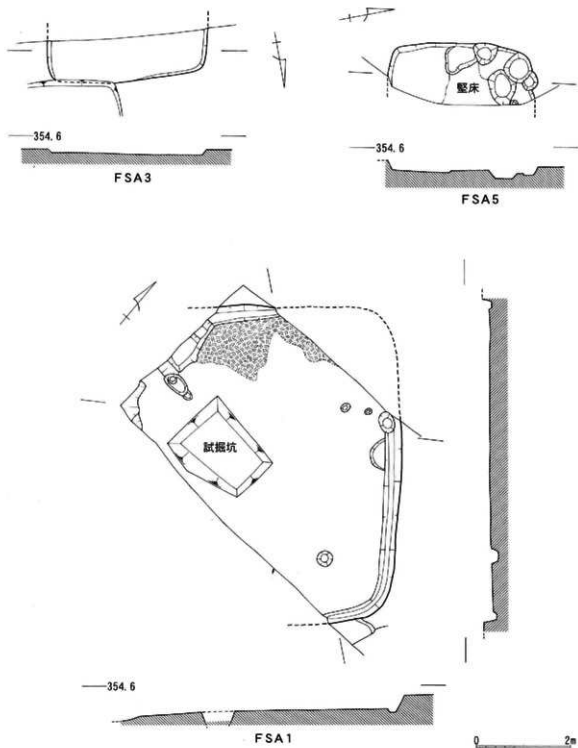
K 1 号竪穴状遺構 (KSX 1)

遺構 (18図) 1 号住居址と重複して南に位置する。調査では東壁部分のみ確認しただけで、全体の形態や規模等は不明である。床面は住居址よりも深く、幾分窪んでいる。

遺物 (23図) 底部外面に糸切り痕を残す須恵器杯 (84) が出土しているにすぎない。

L1号住居址 (LSA1)

遺構 (19図) 調査区の北端の遺構で、南側の一部を調査したにすぎない。形態は東壁が折れ曲がる不整形なもので、攪乱もあり規模や主軸方向は不明である。カマドは南壁中央に構築されていたものと思われ、火床焼土が確認された。カマド左には長軸1.5m・深さ9cm用途不明な土坑状掘り込みがみられる。中及び周辺にはカマド構築材の一部とみられる角礫が散在していた。



17図 F1・3・5号住居址実測図 (1:80)

遺物 (23図) 出土遺物はカマド周辺からのもので、土師器坏 (85~87)・甕 (89~91)、黒色土器碗 (88) の器種がある。共にロクロ調整で、坏類の底部外面には糸切り痕を残す。

L 2号住居址 (L SA 2)

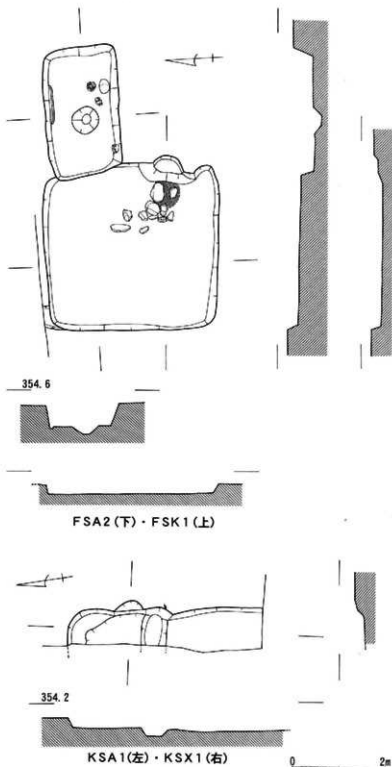
遺構 (19図) 調査区の南側に位置し、調査では住居址中央左側の一部を露呈した。形態は長方形が予想され、長軸 (主軸) はN18°E方向にあり、5.0mの規模になる。検出面からの深さは中央部で43cmを測る。カマドは北壁構築されており焼土塊化した火床を残す。床面は落ち込み部を除き平坦で堅緻である。小穴が3個確認されているが位置的に主柱穴にはならない。

遺物 (22図) 出土量は多く、器種も多岐にわたる。土師器坏 (48~52・54・55)・碗 (64)・甕 (75~79)・片口鉢 (80)、黒色土器坏 (53・56~63)・碗 (65)、灰軸陶器皿 (66・67・69・70)・碗 (71)、緑軸陶器碗 (72~74)、須恵器四耳壺 (81) 等が出土している。共にロクロ調整を基本にしており、土師器・黒色土器の坏類内面の調整はヘラミガキが施され、底部外面には糸切り痕を残す。緑軸陶器の出土は唯一この遺構だけである。この他に鉄製の芋引金 (24図125・126) が出土している。

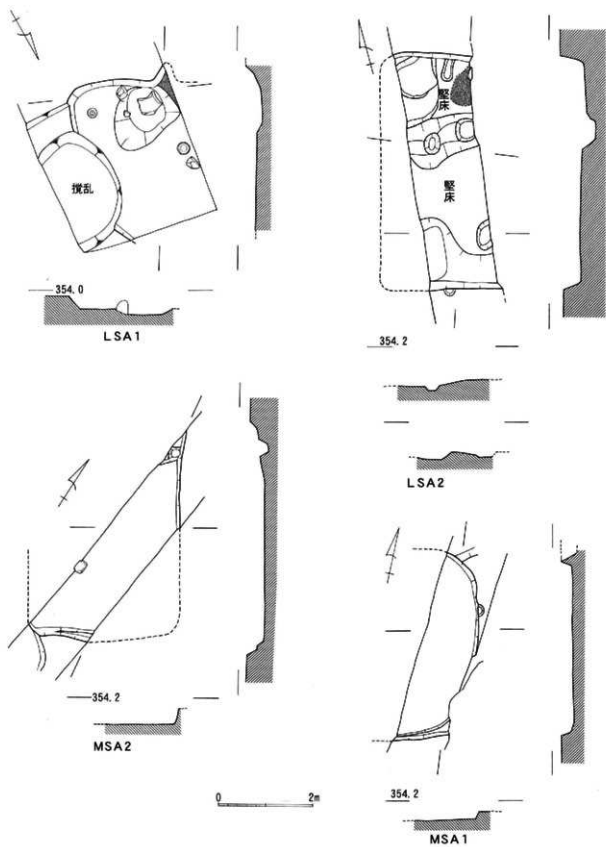
M 1号住居址 (M SA 1)

遺構 (19図) 調査区の南側に位置し、調査では東壁側の一部分を露呈したにすぎない。形態は各壁が丸味を帯びる隅丸方形を呈し、一辺4m前後の規模を推定する。検出面からの掘り込みは16cmを測り、底面は平坦で軟弱である。焼土等内部施設に関与するものは確認されない。

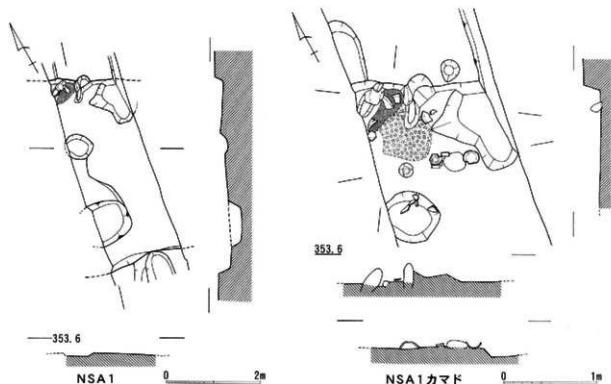
遺物 (23図) 出土量は少なく、図上復元可能な土器片には須恵器坏 (92)・鉢 (94) があるにすぎない。93の土器皿は中世の所産であろう。この他に砂岩製砥石 (24図121)・釘 (122) が出土している。砥石は4面が使用されている。



18図 F 2号住居址・1号土坑、K 2号住居址・1号竪穴状遺構実測図 (1:80)



19回 L1・2号住居址、M1・2号住居址実測図(1:80)



20図 N1号住居址実測図(1:80、カマド1:40)

M2号住居址(MSA2)

遺構(19図) 1号住居址の北に位置し、一部重複関係にある。調査では南東部の一部を検出しただけで、規模や内部施設の存在等不明である。形態は長方形を呈するものと思われる。床面は軟弱で、やや南壁方向に傾斜を有する。

遺物(23図) 出土量は少なく、器種には土師器甕(101)、黒色土器杯(95・96)、須恵器杯(97・98)・蓋(99)・甕(102)・付台壺(103)、灰釉陶器椀(100)等がある。杯のロクロからの切離は回転糸切りによっており、底部外面に痕跡を残す。この他に鉄製の刀子(24図120)が出土している。

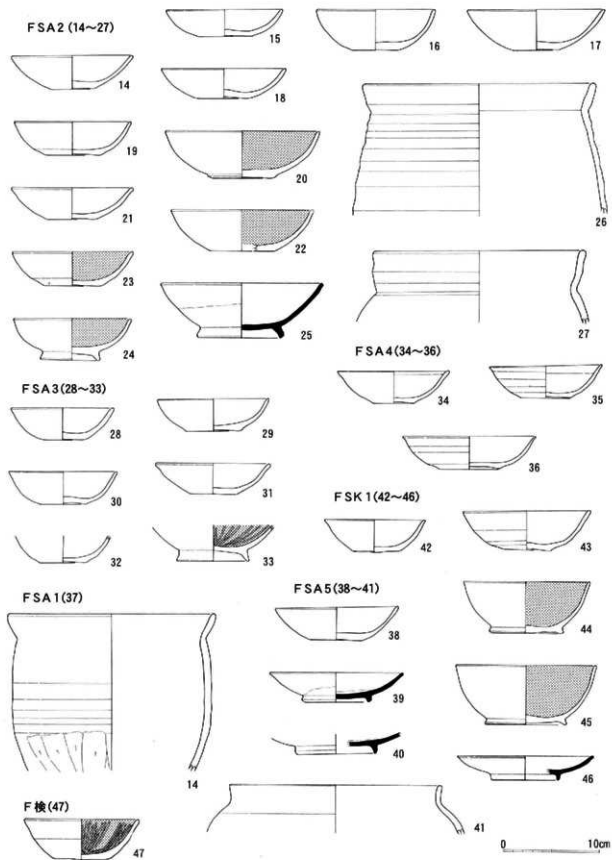
N1号住居址(NSA1)

遺構(20図) 調査区の中央に位置し、奈良時代と推定される2号住居址と重複関係にある。調査では南北方向の住居址中央部分を露呈した。主軸方向はN30°Eを指す。形態は方形になるものと予想され、南北4m前後の規模になる。検出面からの深さは20cmを測る。カマドは北壁に構築された石芯両袖形のもので、袖構築石材と火床焼土・炭化物が残存していた。カマド右には深さ8cm程の不整形土坑が掘り込まれており、貯蔵穴の用途が考えられる。カマド前面にも直径50cm・深さ5cmの掘り込みが認められた。床面は平坦堅緻である。

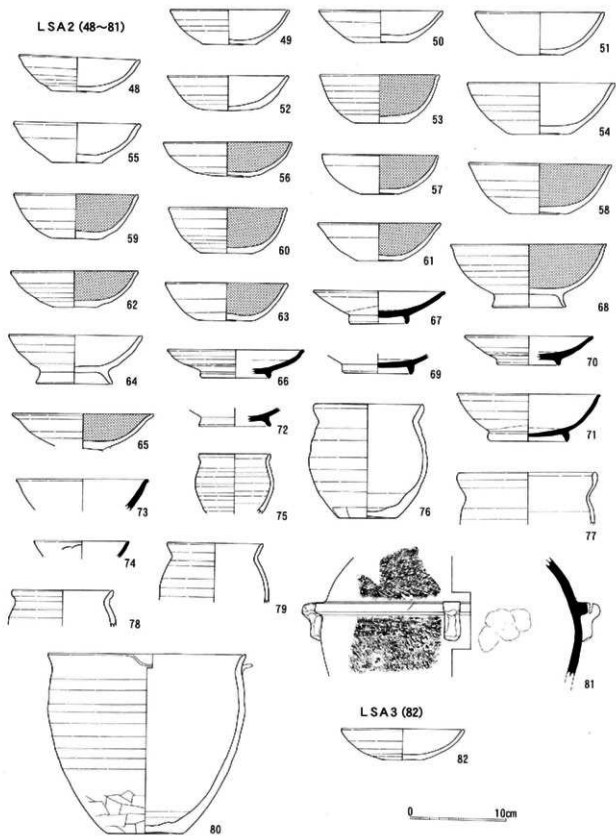
遺物(23図) 遺物の出土はカマド周辺からのものが多い。器種には土師器杯(104~111)・甕(116)・鉢(117)、黒色土器皿(112)、灰釉陶器椀(113)、須恵器高台杯(115)・高台壺(114)等がある。118のI縁部が外反する長胴の甕は、奈良時代の所産と考えられる。この甕を本住居址に位置づけるよりも重複関係にある2号住居址に所属するものであろう。

(4) 時期不明・その他の遺構

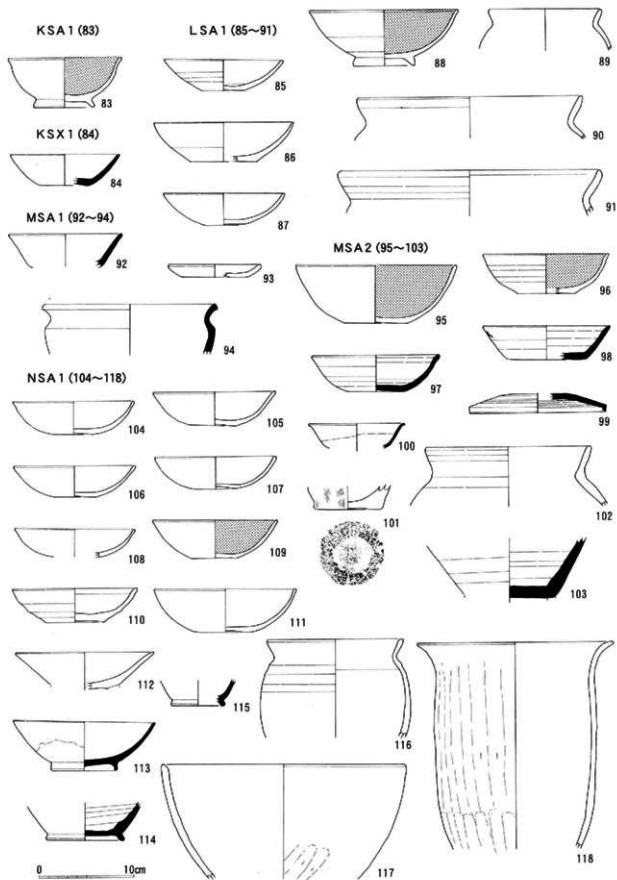
各調査区から土坑・小穴・溝跡等が検出されているが、出土遺物がなく時期を判定することは困難である。また、用途や性格を推定することは更に難しい。D区・H区・E区の調査区からは出土遺物がなく、検出遺構は近世以降の畑作によるものと推定される。遺跡南端のP区の遺構は検出面から平安時代の遺物が採集されていることから、消極的ながら当該期の所産と考えられる。



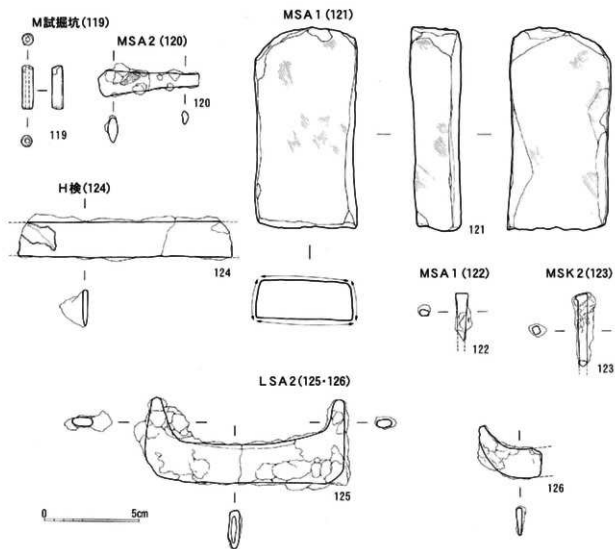
21图 F 1 ~ 5号住居址・1号土坑、検出面出土土器実測图 (1 : 4)



22图 L2·3号住居址出土土器实测图(1:4)



23图 K1号住居址·聚穴状遺構、L1号住居址、M1·2号住居址、N1号住居址出土土器実測図(1:4)



24図 石・鉄製品実測図 (1:2)

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	
			口径	底径	器高						口径	底径	器高			
FSA 1 (21図)							22	黒色	*	14.8	6.7	4.5	1/4	*、*、*、*	*、黒	
38	土師	壺	21.6			1/8	ロクロ、外:ヘラケズリ、内:ナデ	23	*	*	12.7	6.0	3.7	4/3	*、*、*、*	*
FSA 2 (21図)							24	*	碗	12.4	6.1	4.5	1/2	*、*、*、*	*	
14	土師	坏	12.7	4.7	3.6	完形	ロクロ、糸切り	25	灰輪	*	16.9	8.6	5.8	*	*	溜け掛け
15	*	*	12.2	5.7	2.9	1/2	*、*	26	土師	壺	26.1			1/3	*	内:ナデ
16	*	*	12.3	5.2	4.3	1/4	*、*、内:ヘラミガキ	27	*	*	21.2			ママ	*	
17	*	*	14.4	4.7	4.3	*	*、*、*、*	FSA 3 (21図)								
18	*	*	13.0	5.3	3.2	*	*、*、*、*	28	土師	坏	10.8	4.1	3.4	2/3	ロクロ、糸切り	
19	*	*	12.3	5.8	4.5	*	*、*	29	*	*	11.7	5.6	3.4	1/4	*、*	
20	黒色	*	16.2	6.1	5.6	1/3	*、*、内:ヘラミガキ・黒	30	*	*	11.5	5.9	3.5	1/6	*、*	
21	土師	*	12.8	5.4	3.4	1/2	*、*、*、*	31	*	*	12.0	4.9	3.3	1/2	*、*	

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等						
			口径	底径	器高						口径	底径	器高								
32	*	*	5.1			ママ	ロクロ、糸切り	55	土師	*	13.4	5.4	4.2	1/3	*、*						
33	黒色	碗		7.6		*	*、*、内:ヘラミダキ・黒	56	黒色	*	13.6	4.3	3.6	*	*、*、内:ヘラミダキ・黒						
F S A 4 (21図)								57							*	*、*、*: * → *					
34	土師	坏	11.4	4.4	3.4	1/2	ロクロ、糸切り	58	*	*	15.3	6.6	5.3	1/2	*、*、*: * → *						
35	*	*	11.4	5.5	3.6	2/3	*、*	59	*	*	13.2	5.5	4.8	5/6	*、*、*: * → *						
36	*	*	14.0	6.2	3.5	1/4	*、*	60	*	*	12.5	5.6	4.8	3/4	*、*、*: * → *						
F S A 5 (21図)								61							*	*、*、*: * → *					
38	黒色	坏	12.2	5.0	3.5	完形	ロクロ、回転ヘラケズリ	62	*	*	13.4	4.8	3.8	3/5	*、*、*: * → *						
39	灰釉	皿	13.8	6.6	3.2	2/3	*、漬け掛け	63	*	坏	13.0	6.2	4.0	3/4	ロクロ、糸切り、内:ヘラミダキ・黒						
40	灰釉	皿		8.2		1/4	*、*	64	土師	碗	14.1	8.1	5.1	1/3	*、*						
41	土師	甕	21.6			1/8	*	65	黒色	*	15.0			1/2	*、*、内黒						
F S K 1 (21図)								66							灰釉	皿	14.4	7.5	3.0	1/4	*、漬け掛け
42	土師	坏	10.5	5.0	3.5	1/2	ロクロ、糸切り	67	*	*	14.0	6.3	3.5	1/3	*、*、暗緑色						
43	*	*	13.2	5.1	4.2	完形	*、*	68	黒色	碗	16.6	7.8	6.7	2/5	*、糸切り、ヘラミダキ・黒						
44	黒色	碗	13.1	7.8	4.5	*	*、*、内:ヘラミダキ・黒	69	灰釉	皿		7.5		3/4	*、漬け掛け、暗緑色						
45	*	*	14.6	8.3	6.3	1/3	*、*、*: * → *	70	*	*	13.7	6.8	3.1	1/4	*、*、*						
46	灰釉	皿	14.2	6.9	2.6	1/8	*、漬け掛け	71	*	碗	15.4	8.7	5.0	1/3	*、*、*						
F 検出面 (21図)								72							緑釉	*		7.6		1/4	*
47	黒色	坏	12.0	6.4	3.3	1/6	ロクロ、糸切り、内:ヘラミダキ・黒	73	*	*	14.0				1/6	*					
L S A 1 (22図)								74							*	*	10.0		1/10	*、陰刻	
85	土師	坏	12.6	4.6	3.3	完形	ロクロ、糸切り	75	土師	甕	7.6				1/4	*					
86	*	*	14.8	7.1	4.2	1/4	*、*	76	*	*	11.6	6.2	12.1	1/3	*、内:ナデ						
87	*	*	12.8	4.7	3.4	完形	*、*	77	*	*	14.8				1/6	*					
88	黒色	碗	15.8	6.5	5.9	1/2	*、*、内:ヘラミダキ・黒	78	*	*	10.8				*	*					
89	土師	甕	11.2			1/4	*	79	*	*	10.8				1/5	*					
90	*	*	23.8			1/6	*	80	*	片口罎	30.8	8.0	19.1	1/3	*、糸切り、内:ナデ						
91	*	*	27.9			1/8	*	81	須恵	風耳壺						外:タタキ目、内:ナデ					
L S A 2 (23図)								L S A 3 (22図)													
48	土師	坏	12.8	5.2	3.7	3/5	ロクロ、糸切り	82	土師	坏	13.0	4.5	4.3	3/5	ロクロ、糸切り						
49	*	*	12.6	5.8	3.7	3/4	*、*	K S A 1 (23図)													
50	*	*	13.1	5.8	3.4	*	*、*	83	黒色	碗	11.9	6.2	5.3	完形	ロクロ、糸切り、内:ヘラミダキ・黒						
51	*	*	13.8	4.9	4.5	1/5	*、*	K S X 1 (23図)													
52	*	*	12.8	4.4	3.7	1/3	*、*	84	須恵	坏	11.6	7.0	3.3	1/5	ロクロ、糸切り、軟質						
53	黒色	*	12.6	6.0	5.1	1/2	*、*、内:ヘラミダキ・黒														
54	土師	*	15.8	6.6	5.4	3/4	*、*														

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
M S A 1 (23図)							N S A 1 (23図)								
92	須恵	坏	14.0			1/8	ロクロ	104	黒色	坏	12.3	5.1	3.5	完形	ロクロ, 糸織り, 内:ヘラミガキ・黒
93	土師	皿	9.5	7.1	1.4	1/5	＊、ヘラケズリ	105	土師	＊	12.7	4.4	3.5	1/8	＊、＊
94	須恵	鉢	19.9			1/8	＊	106	＊	＊	12.8	4.8	3.3	1/3	＊、＊
M S A 2 (23図)															
95	黒色	坏	17.0	6.8	6.2	2/5	ロクロ, 糸織り, 内:ヘラミガキ・黒	107	＊	＊	12.6	4.1	3.4	1/6	＊、＊
96	＊	＊	13.2	6.0	4.2	1/5	＊、＊、＊; ＊・＊	108	＊	＊	12.7			3/4	＊
97	須恵	＊	13.4	6.2	3.9	3/4	＊、＊	109	黒色	＊	13.0	4.2	4.1	完形	＊、糸切り
98	＊	＊	13.4	8.6	3.5	1/3	＊、非回転ヘラケズリ	110	土師	＊	13.1	6.4	3.6	1/4	＊、＊
99	＊	蓋	14.4			1/4	＊、天井:回転ヘラケズリ	111	＊	＊	14.9	5.2	4.6	完形	＊、＊
100	灰釉	椀	10.2			1/7	＊、漬け掛け	112	＊	高台皿	12.5			1/8	＊、＊
101	土師	壺		7.2		3/4	外:ハナナデ, 内:ナデ, 蓋:木製板	113	灰釉	椀	14.9	6.7	5.3	3/5	＊、漬け掛け
102	須恵	＊	17.5			1/8	ロクロ	114	須恵	高台皿	8.1			ママ	＊、回転ヘラケズリ
103	＊	高台蓋				1/3	＊	115	＊	高台坏	4.5			1/4	＊
								116	土師	壺	14.1			＊	＊
								117	＊	鉢	25.6			＊	外:ナデ・ヘラケズリ, 内:ナデ
								118	＊	壺	20.4			1/3	＊:ヘラケズリ, 内:ナデ

IV ま と め

国補街路事業地点・上高田第一土地区画整理事業地点の調査成果をあわせてまとめとしたい。

発掘調査地は現道の確保や工事工程・通用口・環・地下埋設物等の制約により線的で不連続なものである。そのため遺跡または保護対象地に占める調査率は高いとはいえない。また、遺跡の南限は試掘調査や本発掘の成果から旧河道の左岸河岸段丘にあることは判明したものの北限や東側の範囲は確定されない。ただし、東側は中沢城館跡からは平安時代の遺物が表面採集されていることから当該期においてはこの地域まで広がっていた可能性が高い。残念ながらA区以東は後世の攪乱が著しく調査で確認することはできなかった。北限についての可能性として、桜ヶ岡中学校建設による遺物の出土の伝聞がないことから南八幡川をもって境と推定する。いわば遺跡の推定地は字境園(3図)によるところの西方・寺村・南向と続く扇状地内における帯状の微高地に位置するといえる。

つぎに時代・時期別の遺構の分布を瞥見してみよう。この遺跡で最初に人々の生活の痕跡を見ることができるのは古墳時代前期になってからである。西端近いF区に住居址1軒、中央付近に位置するC区に3軒を検出した。F区とC区は直線距離にして120m程離れており、この区間内にあるD・E・H区において当該期の遺構・遺物が確認されていない。そして、南側の調査区からも検出されないことから近時間差をもって形成された小集落かまたは小規模集落内における二つの小単位遺構群と考えられる。4軒の住居址共に全形を露呈することはできなかったが、基本形態は方形を呈するものと思われる。比較的露呈度の高いF4号住居址に代表させて当該期の遺構の特色をみてみよう。規模は主軸4.6m・東西5m前後を測る小振りな遺構である。炉は地床炉で柱穴間中央に位置し、弁形に河原石を据え置く。床面は堅緻な貼り床が施され、各壁下には周溝状小溝を巡らす。主柱穴は4個方形配列である。C4号住居址も同様施設を用いられるが、間仕切り用と思われる小溝が掘り込まれ、炉の位置が主柱穴内空間に設けられている点異なりをみせる。出土土器においては前者の壺に柳指平行線文・半円弧文が、後者においては壺に同康状文・波状文が施され、弥生時代の系譜がみられ、時期的に時間差はみとめられない。古墳時代後期末から奈良時代の遺構にA7号溝址がある。また、奈良時代の遺構はA区で溝址・土坑が検出されているものの居住施設はみられない。N2号住居址を当該期に所属したが、一部分の露呈であり、また周辺に同時期の遺構がないことから疑問視する向きもおこる。ともかくA区近隣に小規模集落跡の存在が予想される。平安時代ではA区で住居址2軒、C区で3軒、F区で4軒・土坑1基、K区で1軒、L区で2軒、M区で2軒、N区で1軒の総計16軒の住居址と土坑1基が確認されている。また、L区からP区にかけて確認された小穴・土坑・溝址も当該期の遺構と考えられる。これらの遺構の展開分布をみるとA区周辺、C区から南に展開する地域そしてF区周辺に遺構のまとまりが認められる。すなわち西方遺跡全面に当該期の集落が形成されたのではなく、小規模単位で存立していたものと考えられる。時期はC3号住居址が先行するようで、坏類は須恵器と黒色土器に限られ、また2号住居址との重複関係にある。坏類の口径が平均12cm台になる10世紀前半と11cm台になる中葉の2時期に大別される。遺物を比較的多く出土したF2号・L2号・N1号の各住居址は前者の時期で、後者にはF3号・4号住居址を抽出する。西方遺跡の平安時代集落は9世紀後半から形成が始まり、10世紀前半に盛期があり、10世紀中頃まで継続していたといえる。

[参考文献]

長野市教育委員会 1998「解花川扇状地遺跡群西方遺跡・中沢城館跡」長野市の埋蔵文化財第91集



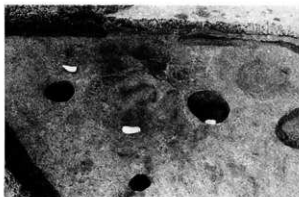
Ⅲ-1 F区全景



Ⅲ-2 FSA4 (正面)



Ⅲ-3 FSA4 (側面)



Ⅲ-4 FSA4 炉・柱穴



Ⅲ-5 FSA4 入口部・柱穴

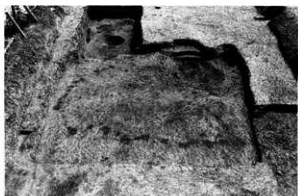
PL : F区の遺構



Ⅲ-6 FSA1



Ⅲ-7 FSA5



Ⅲ-8 FSA2(F)・SK1(上)



Ⅲ-9 FSA2カマド



Ⅲ-10 FSK1



Ⅲ-11 K区全景

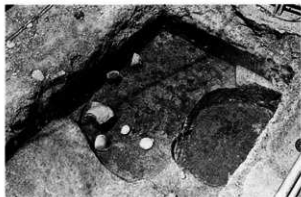


Ⅲ-12 KSA1(左)・SX1(右)

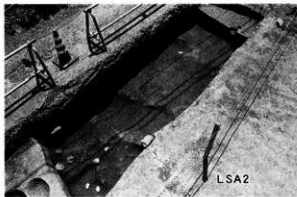


Ⅲ-13 L区(F)・M区(L)

PL:F・K・L・M区の遺構



Ⅲ-14 LSA1



Ⅲ-15 LSA2



Ⅲ-16 MSA1



Ⅲ-17 MSA2



Ⅲ-18 N区(下)・PK(上)



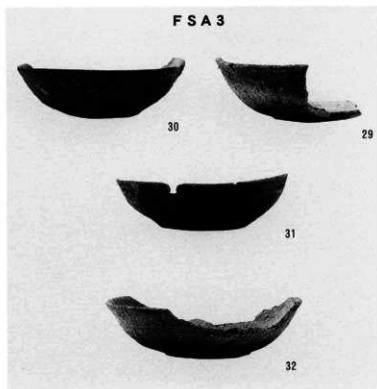
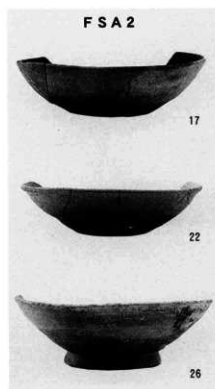
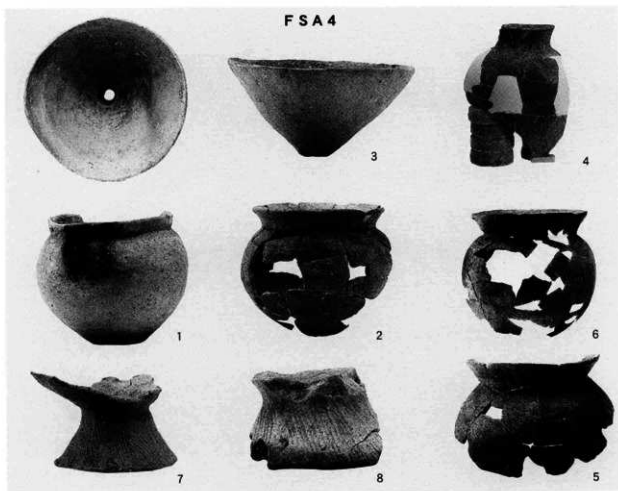
Ⅲ-19 NSA1



Ⅲ-20 NSA2



Ⅲ-21 発掘調査従事者



FSA 4



35



36

FSA 5



39



40

FSK 1



44



45



46



43

F 検



48

LSA 1



88



86



84



89

LSA 2



60



62



53



61



64



56



71

NSA 1



105



111



108



114

報告書抄録

ふりがな	すそばながわせんじょうちせいせきくん にしがたいせき に						
書名	裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡(2)						
副書名	一上高田第一土地区画整理事業地点一						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第107集						
編集者	矢口忠良・飯島哲也・小野由美子						
編集機関	長野市教育委員会 文化財課埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106						
発行年月日	2004(平成16)年9月30日						
印刷所	奥山印刷工業株式会社 (長野市大豆島本郷前5959-1 TEL 026-221-3243)						
所収遺跡名	所在地	コード		経緯度 (日本測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
にしがたいせき 西方遺跡	ながのけん ながのし ながのあひ 長野県長野市大学 なかだ あひにしがた 高田字西方1027 他	20201	B-018	北緯 36° 38' 21" 東経 138° 12' 25"	19960819 ~19960912 19980701 ~19980717 19990506 ~19990524	800㎡	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
西方遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡	1軒	土師器	小単位集落跡	
		古墳時代後期・奈良時代	竪穴住居跡	1軒	土師器、須恵器		
		平安時代後期	竪穴住居跡 土坑・小穴・溝址	10軒	土師器、須恵器、 灰釉陶器、緑釉陶器、 鉄・石製品	小規模集落跡	
		時期不明 (近世以降)	畝状溝址				

長野市の埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年	第1集 『筑波長石古墳群』	1991年	第90集 『信平遺跡・宮ノ下遺跡』
1976年	第2集 『茂川西Ⅱ』	第91集 『東田城跡Ⅱ』	
1978年	第3集 『中村遺跡』	第92集 『茂川扇状地遺跡群 三輪遺跡⑤・小島扇状地遺跡群 上中島遺跡』	
	第4集 『龜崎遺跡群Ⅱ』	第93集 『松原遺跡Ⅱ』	
1979年	第5集 『龜崎遺跡群Ⅲ』	第94集 『小島扇状地遺跡群 宮西遺跡』	
1980年	第6集 『三輪遺跡Ⅰ-村木内Ⅱ-元神社遺跡』	第95集 『茂川扇状地遺跡群 幸丸・バレイスA・E地点②③』	
	第7集 『田中沖遺跡』	第96集 『石川東Ⅱ遺跡⑥⑦』	
	第8集 『篠ノ井遺跡群Ⅰ』	1995年	第97集 『茂川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
	第9集 『西ノ原遺跡(第1~3区)・徳川遺跡・龜崎遺跡群③』	第98集 『東田城跡③』	
1981年	第10集 『藤谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』	第99集 『茂川扇状地遺跡群 徳間本家遺跡遺跡』	
	第11集 『新清水遺跡・大津遺跡・大清水遺跡』	第100集 『八幡山遺跡』	
1982年	第12集 『茂川扇状地遺跡群 幸丸・バレイスA・E地点』	第101集 『茂川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡②・吉田河東遺跡』	
1983年	第13集 『茂川扇状地遺跡群前田遺跡・川内東Ⅱの遺跡・石川東Ⅱの遺跡』	第102集 『龜崎遺跡群Ⅲ①・石川東Ⅱ遺跡Ⅲ②』	
	第14集 『石川東Ⅱの遺跡④・上野沢遺跡』	第103集 『松代城跡Ⅱ』	
1984年	第15集 『新清水遺跡②』	第104集 『松代城跡Ⅲ』	
1985年	第16集 『石川東Ⅱの遺跡⑤(付上野沢遺跡)』	1996年	第105集 『茂川扇状地遺跡群 吉田西ノ原遺跡・三輪遺跡⑥⑦・桑河原遺跡』
1986年	第17集 『茂川扇状地遺跡群 幸丸・バレイスA・C・D地点』	第106集 『茂川扇状地遺跡群 中野遺跡Ⅱ』	
	第18集 『龜崎遺跡群Ⅳ 市色池Ⅱ-小田井村地点遺跡』	第107集 『茂川扇状地遺跡群 中野遺跡Ⅲ』	
1987年	第19集 『土川村平塚古墳-東条遺跡連続発掘調査-』	第108集 『茂川扇状地遺跡群 松ノ木遺跡』	
	第20集 『三輪遺跡②』	第109集 『布島塚1号古墳・2号古墳』	
	第21集 『子川小学校遺跡』	第110集 『相模南遺跡』	
	第22集 『長野市山田高校グラウンド遺跡』	1997年	第111集 『小島・柳原遺跡群 本内Ⅱ-元神社遺跡Ⅱ』
1988年	第23集 『須田遺跡群 富士宮遺跡』	第112集 『新花川扇状地遺跡群 村南遺跡』	
	第24集 『龜崎遺跡群 V 扇形敷遺跡』	第113集 『茂川扇状地遺跡群 松ノ木遺跡Ⅱ』	
	第25集 『小島扇状地遺跡群 南川高遺跡』	第114集 『布島塚1号古墳・2号古墳』	
	第26集 『東条遺跡』	第115集 『相模南遺跡』	
	第27集 『小島扇状地』	第116集 『新花川扇状地遺跡群 村南遺跡Ⅱ』	
	第28集 『新清水遺跡』	第117集 『茂川扇状地遺跡群 松ノ木遺跡Ⅲ』	
	第29集 『茂川扇状地遺跡群 茂川南遺跡』	1998年	第118集 『長野市遺跡群 西ノ原遺跡』
	第30集 『徳田山古墳群』	第119集 『小島扇状地遺跡群 本内Ⅱ-元神社遺跡Ⅲ』	
	第31集 『新川川遺跡』	第120集 『新花川扇状地遺跡群 尾島遺跡』	
1989年	第32集 『中島遺跡』	第121集 『西前山古墳』	
	第33集 『松川遺跡』	第122集 『新花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城跡Ⅱ』	
	第34集 『石川東Ⅱ遺跡①』	第123集 『松河遺跡Ⅱ』	
	第35集 『篠ノ井遺跡群Ⅱ』	第124集 『松河遺跡Ⅲ』	
1990年	第36集 『沼津遺跡Ⅱ』	第125集 『松河遺跡Ⅳ』	
	第37集 『篠ノ井遺跡群Ⅲ』	第126集 『松河遺跡Ⅴ』	
1991年	第38集 『東田城跡・下平木遺跡・三輪遺跡③』	第127集 『桑河原遺跡②・田中沖遺跡Ⅲ』	
	第39集 『龜崎遺跡群⑥⑦・石川東Ⅱ遺跡⑥⑦』	第128集 『茂川扇状地遺跡群 小松原遺跡』	
	第40集 『松原遺跡』	第129集 『松河遺跡Ⅵ』	
	第41集 『小島扇状地遺跡群 中保遺跡』	第130集 『桑河原遺跡Ⅲ』	
	茂川扇状地遺跡群 押原遺跡・横田遺跡』	第131集 『松河遺跡Ⅶ』	
1992年	第42集 『田中沖遺跡Ⅱ』	第132集 『松河遺跡Ⅷ』	
	第43集 『新宮遺跡』	第133集 『松河遺跡Ⅷ』	
	第44集 『龜崎遺跡群Ⅶ』	第134集 『松河遺跡Ⅸ』	
	第45集 『石川東Ⅱ遺跡⑥⑦』	第135集 『松河遺跡Ⅹ』	
	第46集 『篠ノ井遺跡群②』	第136集 『松河遺跡Ⅹ』	
	第47集 『茂川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本尾遺跡・柳田遺跡・松島遺跡②(分冊)』	第137集 『松河遺跡Ⅹ』	
	第48集 『小島扇状地遺跡群 中保遺跡Ⅱ』		
1993年	第49集 『茂川扇状地遺跡群 三輪遺跡④』		
	第50集 『茂川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』		
	第51集 『松原遺跡Ⅲ』		
	第52集 『田代宮母遺跡』		
	第53集 『須田遺跡』		
	第54集 『川内遺跡再入塚』		
	第55集 『茂川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅲ』		
	第56集 『上ノ見遺跡』		
	第57集 『石川東Ⅱ遺跡Ⅱ』		
	第58集 『松原遺跡Ⅳ』		
	第59集 『土師師代遺跡Ⅱ(東条遺跡)』		

長野市の埋蔵文化財第 107 集

裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡(2)

平成 16 年 9 月 25 日 印刷

平成 16 年 9 月 30 日 発行

発 行 長 野 市 教 育 委 員 会
編 集 文 化 財 課 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
印 刷 奥 山 印 刷 工 業 株 式 会 社